

余暇行動研究における 方法論的問題と課題

原田 宗彦 (ペンシルバニア州立大学院)

緒言

現代の余暇行動研究を含む社会科学一般は、経験主義と実証主義によって強く支配されているといっても過言ではない。かつて17世紀のヨーロッパに萌芽した近代自然科学の『方法』は、その後の近代社会科学の発展に大きな影響を与えた。そして自然科学の方法論的基盤である要素還元主義と、数量的かつ力学的世界観は余暇行動研究の中にも確固とした地位を築いている。多くの余暇行動研究者は、人間行動が最も単純な要素に還元できると考え、それが現象としての余暇行動を理解する上での究極的な単位として利用できるという立場をとっている。本論文では、現在の余暇行動研究の方法論の動向を吟味し、それに批判と考察を加えることを目的としている。

人間行動は『工学』でできるか？

自然科学の方法により、社会現象や観察可能な個人の行動を数量的に捉えようとする試みには古くより様々な批判が加えられてきた。たとえば、Parsons¹⁾は、社会データはひじょうに複雑であり、それを操作的に分析することは、現実を過度に単純化する危険があると警告し、Sjorberg²⁾は、社会システムの多くの局面が、自然科学的分析によっては理解できないことを示唆した。我国では、佐和³⁾が極端な数量主義に支配されている経済学を批判し、新しい日本の風土に見合った和製経済学を提唱している。また田村は、社会学における社会調査が『社会学を思弁的・観念的な束縛から開放して、社会学を経験的・実証的なものにしてゆく上で寄与した』としながらも、それが過度に『機械化』された結果、本来認識すべき対象である社会や人間が見失われてしまったと批判している。

余暇行動研究においても、このような社会科

学の一般的傾向である数量主義は根強く残っており、測定可能な現象のみが研究対象として分析の俎上に乗せられているのが現状である。

余暇行動研究における量的アプローチ

量的アプローチには、記述的アプローチと科学的アプローチがある。前者は例えば、参加者数や売上げ高といった日常一般的な概念を量的に調査するもので、いわゆる調査研究や応用研究 (applied research) がその範疇にはいる。その一方、科学的アプローチとは、科学的な構成概念や仮説を量的に測定、検証するもので、ここでは理論の発展に主眼がおかれる。

余暇行動研究における記述的アプローチは、レクリエーション活動への参加者調査に代表される需要分析がその主たるものである。BevinsとWilcox⁴⁾によれば、1959年から78年に22の全国的規模のレクリエーション調査が行われ、それらは、公共政策や公共投資に大きな影響を与えている。しかしながら、これらの大規模調査に対する極端な『客観』化、『大容量』化、断片=非包括化、そして脱人間主義化という批判は現在も根強く残っている。

科学的アプローチでは、より正確な科学的知識を得るための測定方法に工夫が加えられている。その中でも仮説的構成概念をより正確に測定するための操作チェック (manipulation check) が行動科学全般のなかで重要視される傾向にある。特にマーケティング研究や消費者研究において測定方法の妥当性や信頼性を検討した研究が多く見られるようになった⁵⁾⁶⁾⁷⁾。余暇行動研究では特に心理学的アプローチにおいて人間のレジャー時の心の状態を測定する方法に工夫が試みられている。例えば、Graefら⁸⁾は、日常経験を測定するための経験サンプリング法 (Experience Sampling Method) を用いた。ESMでは、被験者はポケット・ベルを常時携帯し、それが鳴った時点で、自分自身の情緒的、認知的状態を記入することを義務づけられた。これにより、その時々被験者が行っている活動が、どの程度外発的に、あるいは内発的に動

機づけられたものであるかが測定された。Mannell⁹⁾はまた、余暇行動における精神経験(mental experience)の重要性を強調し、認知的構成概念の測定の必要性を示唆している。すなわち個人のレジャー経験は、態度、信念、知覚といった精神経験によって形成される意識上の経験であると考え、そのため実験室を利用した認知社会心理学の方法が有効であると提唱している。

このように量的アプローチでは、現象の数量化への工夫、新しい現象の概念化などの動きが目につくが、量的表現をより精密にするための『測定法』に関する研究は、余暇研究のなかではまだ充分とはいえず、これから充分な検討が加えられるべき領域であると思われる。

余暇行動研究における質的アプローチ

質的アプローチは3つの方法に大別できる。ひとつは探求的アプローチ(exploratory approach)であり、日常的経験の中から科学以前の知識を用いながら、科学的構成概念を生み出してゆくことを目的とする。この方法は、量的アプローチの初期の段階で用いられている場合が多い。

第二の方法は、臨床的アプローチ(clinical approach)と呼ばれ、量的データを使わずに問答と観察により、そしてそれに準科学的概念を応用することによって現象を理解する方法である。この方法は、治療レクリエーションやレジャー・カウンセリングの分野での将来の発展が予想されるが、現在のところ研究はそれほど活発ではない。

第三は現象学的方法であり、近年、余暇行動研究の分野で注目をあびている。Csikszentmihalyi¹⁰⁾は、現象学的方法を用いてフロー経験のモデルを提唱した。最近では、Harper¹¹⁾が余暇科学における現象学の意味とその利用について概説し、Brandenburg¹²⁾は現象学的仮定のもとに、個人の実際のレジャー認知を理解しようと試みている。この方法においては、『個人の行動を形成する現象は、

行為者によって認知された現象であり』¹³⁾、データは個人の実際の知覚より得られるべきで、外的に課せられた動機や満足といった心理学的概念から得られるものではない。確かにこのアプローチの方法は、複雑な現象を包括的に把握し、理解するには便利であるかもしれない。しかし量的データの不在は、科学的知識の集積、分析、評価を困難にし、現在のパラダイム(通常科学)¹⁴⁾の中で、このアプローチの方法にはあまり高い評価は与えられていない。

結論

余暇行動研究の方法論は、現在2つの方向に進みつつある。ひとつは量的アプローチの測定方法と統計的手法の精緻化であり、他は、質的アプローチへの研究者の関心の高まりである。

科学的に定義づけられた概念を変数化し、測定する作業には、細心の注意が払わなければならない。妥当でなく信頼性の低い測定は、誤まった研究の結果を招くだけでなく、研究の発展を阻害する。またデータは、単に理論の検証だけでなく、その発展と改良を目的に得られるべきであり、研究者自身が研究の方法(技法)と目的を十分に理解していなければならない。

その一方、これまで余暇行動研究のなかで必要条件であった現象の数量化に対する神話が消え、質的なアプローチが見直されるようになってきた。1982年に創刊された『Leisure Studies』は、要素還元主義と数量主義をできるだけ排斥しており、参与的観察や社会踏査がポピュラーな方法として用いられている。このジャーナルは、これからの余暇行動研究が発展してゆく上でのひとつの道標となるのではないと思われる。